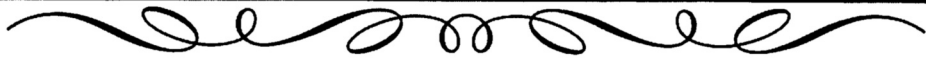


日本ブロンテ協会



2023年第38回大会プログラム



*社会状況により開催形態を急遽変更する場合があります。最新情報を協会ホームページにてご確認ください。(https://brontesociety.jp/)

日時 2023年10月21日(土) 9時50分から17時30分まで
場所 立正大学品川キャンパス 150周年記念館7階1372/137A教室
〒141-8602 東京都品川区大崎4-2-16 TEL 03-3492-5250
アクセス：山手線 大崎駅または五反田駅から徒歩5分。
東急池上線 大崎広小路駅から徒歩1分。

★受付 9:20~

総合司会 中京学院大学特任教授 松原 典子

★開会の辞 9:50 和洋女子大学名誉教授 植松みどり

★研究発表 10:00~12:00 司会 関西外国語大学教授 服部 慶子

1. 記憶と幽霊—『嵐が丘』における幻影としての第一世代キャサリン
日本女子大学非常勤講師 越後谷明恵

2. 「自分だけの部屋」の意義—*Wuthering Heights*の場合
東京学芸大学非常勤講師 石井明日香

司会 九州大学教授 鶴飼 信光

3. ブランウェルの作品における男性像—1834年から36年の作品を中心に
大阪工業大学特任講師 瀧川 宏樹

4. Anne Brontëの絵画をめぐる—考察
日本大学教授 兼中 裕美
—— 休憩 ——

★会場校挨拶 13:00~13:10 立正大学文学部長 村上 喜良

★総会 13:10~13:40 司会 京都教育大学教授 奥村 真紀

事務局からの報告 東京藝術大学教授 侘美 真理

★奨励賞報告 日本ブロンテ協会奨励賞審査委員長 松蔭大学教授 阿部 美恵

★会長挨拶 大東文化大学名誉教授 栗栖美知子

★大会委員長挨拶 立正大学教授 大野 龍浩

★講演 14:00~15:00 司会 中央大学教授 大田 美和

演題「英国小説と私—近刊の拙著から」 東京大学名誉教授 海老根 宏

★シンポジウム 15:10~17:20 「『シャーリー』を読み直す」

発題者 東京工芸大学助教 石井麻璃絵

発題者 鳥取大学教授 杉村 藍

司会・発題者 日本大学教授 田村真奈美

★閉会の辞 17:20 青山学院大学名誉教授 橋本 清一

.....

★懇親会 18:00~20:00 於 レ・アール (カジュアルフレンチ) 会費 6,000円

司会 早稲田大学教授 皆本 智美

研究発表

1. 「記憶と幽霊—『嵐が丘』における幻影としての第一世代キャサリン」

日本女子大学非常勤講師 越後谷明恵

エミリー・ブロンテ (Emily Brontë, 1818-1848) の『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847) には、“ghost,” “spectre,” “phantom”といった表現が何度か登場する。日本語では全て「幽霊」と訳されることが多いが、これらの語は他に「幻影」という意味で使われることもある。作中において、第一世代キャサリンの幽霊像は、ロックウッドが夢現に見た場面と、ヒースクリフの「自分のすぐそばにいる」という証言でしか明確に表されず、他の文学作品のようなはっきりと現れる幽霊と異なり、夢幻や幻覚の類に見える。本発表では、このキャサリンの幽霊を伝統的な「死者の魂」ではなく、記憶や記録から生み出された「幻影」の側面があるとして、幽霊がいかにか生者の記憶に依存した存在であるかを考察していく。また、イギリス社会の中で、死者(幽霊)と記憶の繋がりを宗教的・文化的な変遷から検証することで、死者の存在が永久にあり続けるものなのか、あるいは消滅していくものなのかについても考えたい。

2. 「『自分だけの部屋』の意義—*Wuthering Heights*の場合」

東京学芸大学非常勤講師 石井明日香

Virginia Woolfは*A Room of One's Own* (1929)の中で、女性にとっての自分だけの部屋の意義を主張したが、それより80年以上前に出版されたEmily Brontëの小説*Wuthering Heights* (1847)では、女性たちが自分だけの部屋を持つ/持たない様子が描かれている。女性にとっての自分だけの部屋は、女性が男性との関係ではなく、一人の人間として描かれることを意味するのと同時に、社会の中で女性の場所を規定するものでもある。偶然あるいは一時的にせよ、自分だけの部屋を楽しむ時間を与えられた女性たちは、それによって生きる力や強さ、生きる知恵や自分の人生への満足感を得ている。同時に、自分だけの部屋を持たないことで引き起こされる問題が描かれることで、自分だけの部屋の意義が明らかにされているのである。本発表ではCatherine母娘と語り手Nellyを中心に、女性が持つ/持たない自分だけの部屋の描かれ方とその意義について考察する。

3. 「ブランウェルの作品における男性像—1834年から36年の作品を中心に」

大阪工業大学特任講師 瀧川 宏樹

本発表では、Neufeldt版ブランウェル作品集の第2巻を中心に、ブランウェルが抱く男性像に迫りたい。第2巻が網羅しているのは、1834年から36年までの3年間であり、Neufeldt版作品集全3巻の中でも執筆年数の割にページ数は最も多く、筆が進んだ時期であったと言える。この間、ブランウェルは、ウィリアム・ロビンソンの弟子となり画家を目指し、ロイヤル・アカデミーへの入学に向けた行動をとり、『ブラックウッズ・マガジン』の寄稿者として自身を認めてもらおうと手紙を書き、フリーメイソンに入団もした。つまり、様々な可能性や希望を視野に入れて、将来の職業を模索していた時期であった。同時期にシャーロットがロウ・ヘッドでの教師職で安定して働いていた点と比較すると、この時期の彼の生き様は宙ぶらりんに思える側面もあるが、作品に描かれる男たちの生き様から彼が抱く男性像を探ることで、男性としての役割や、それに対する彼の考え方や葛藤を読み取りたい。

4. 「Anne Brontëの絵画をめぐる一考察」

日本大学教授 兼中 裕美

ブロンテ姉妹は主に小説や詩集等の文学作品に注目が集まり、絵画作品は、Branwellによる肖像画を除いて取り上げられることは少なかった。しかしAlexander and Sellarsによる絵画集の出版や、作中に出てくる絵画、例えば*Jane Eyre*でJaneが読むBewickの本など、広い意味での絵画への関心が高まっている。

末っ子のAnneの絵画に関して、他の画家の絵から模写したものが多く、そのいくつかは単に模倣したのではなく彼女の独創的な点も指摘されている。そこから制作時の状況について推測した伝記的な解釈や、彼女の小説で主人公が画家である*The Tenant of Wildfell Hall*との比較から、彼女の絵画の変遷を彼女自身の成長と結びつける解釈が出されている。

本発表では、類似点が指摘されている絵画と比較して、彼女の絵画に与えた影響を掘り下げ、Anneの絵画面の特徴について考察したい。

シンポジウム

「『シャーリー』を読み直す」

『シャーリー』(1849)は、シャーロット・ブロンテの小説では唯一、主人公が一人称で語る自伝形式の小説ではなく、ある特定の時代の社会を扱った小説である。さまざまな登場人物と社会問題を扱っているためにしばしばその統一性が問題になるが、それだけに多様な観点からの読みが可能になるとも言える。本シンポジウムでは、三人の発表者がそれぞれの観点から『シャーリー』の新たな読みの可能性を探ってゆく。

『シャーリー』における女性の歩行と近代化

東京工芸大学助教 石井麻璃絵

ラッドイト運動が起こった19世紀初頭のイギリス中部を舞台にした『シャーリー』は、シャーロット・ブロンテが歴史的事実をモチーフにして描こうとした物語である。本発表では、司祭の姪であるキャロライン・ヘルストンの歩行に注目し、近代化の波が押し寄せ変化しつつある社会の中で、女性が歩行によっていかに自身の物理的、精神的な空間を築いていくのか考察する。近年、社会科学の分野で、ティム・クレスエルやジョン・アーリは、「移動性」を単なる物や人の移動にとどまらず、時間や空間の社会的な生産物と位置づける。キャロラインが移動の原点である歩くことを通して、近代化を進める工場主と抵抗する労働者の間の軋轢がある社会や人々、自然とどのように相互作用するのか、移動性、歩行、ジェンダー、地域と近代化の関係から探りたい。

『シャーリー』の特異性

鳥取大学教授 杉村 藍

シャーロットが執筆した4つの小説の中で、『シャーリー』は他の3作と異なる特徴をもつ。ラッドイトという歴史的事件に取材した社会小説である点がよく指摘されるが、主人公の造形においても他の小説と大きく異なる。

そうした「特異な」要素をもつ『シャーリー』だが、そこには同時に作者の特質も見出せるのではないだろうか。例えば、「英国最初のフェミニズム小説」と呼ばれた『ジェイン・エア』は『シャーリー』に先立って出版されたが、女性の生き方についてははるかに多く論じているのは後者である。また、執筆に当たって語りの技法に趣向を凝らすのがシャーロットの常だったが、『シャーリー』では4つの小説の中で唯一、全知の語りが用いられている。本発表では『シャーリー』のフェミニズムをめぐる言説と語りの技法に注目し、この小説の特異な側面を通し、小説家シャーロット・ブロンテの特徴を考える。

『シャーリー』における2つの世界

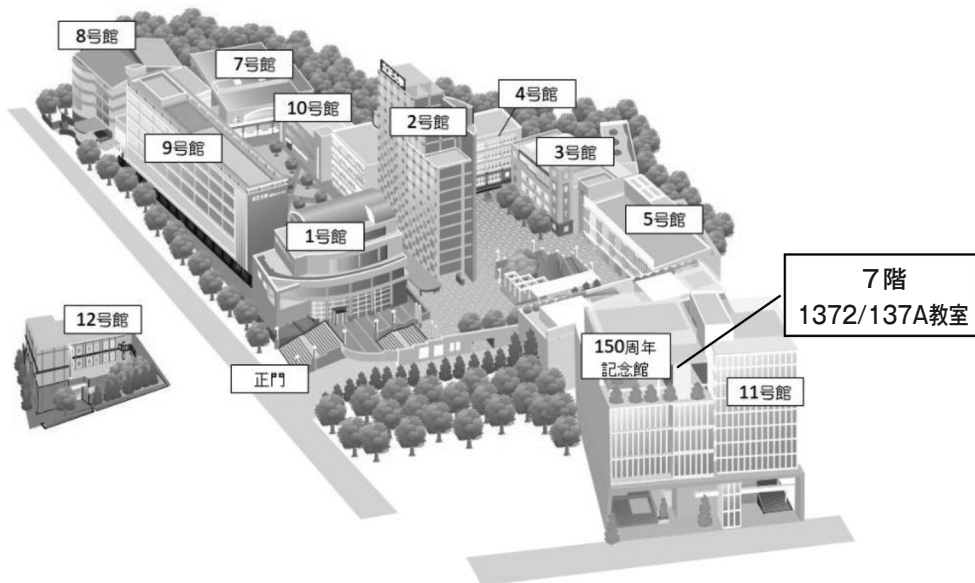
日本大学教授 田村真奈美

『シャーリー』はナポレオン戦争の時代を舞台にして、シャーリーとキャロライン、ロバートとルイのムア兄弟を中心に、ウエスト・ライディング地方の架空の3つの教区ブライアフィールド、ウィンベリー、ナネリーからなるコミュニティに暮らす人々とそこで起こったことを描いた小説である。シャーロット・ブロンテはこのコミュニティを対照的な2つの世界(男性/女性、英国/外国、持つ者/持たざる者、国教徒/非国教徒など)というモチーフを使って描き出す。これら2つの世界における相互の無理解や断絶が問題を生んでいると読めるのだが、詳細に見てゆくと対照的であるはずの両者が実は重なっていたり、境界が曖昧であったりすることにも気づく。本発表では、多様な人物・価値観を扱った小説『シャーリー』を、2つの世界の描かれ方に着目して読んでみたい。

立正大学【アクセス】



【キャンパスマップ】



日本ブロンテ協会事務局

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8 東京藝術大学音楽学部 侘美真理研究室内

e-mail: brontesocietyjapan@gmail.com